

SONOKO
OBUCHI

MY
LIFE IN
STITCHES



個展のコンセプト

Title: *My Life in Stitches*

この個展は、アートを通じて回復力と変化を描いた、大淵による深い個人的体験を反映させた作品群です。コロナ禍の影響で、10代の子どもがうつ病や不登校に悩み、長年住んでいたロンドンから静かな村へ移住したことがきっかけとなり、家族との関係を再構築しながら、自身と向き合う過程が描かれています。作品を通じて、壊れたものを修復し、新たな強さと美しさを見出すことの大切さを表現しています。

タイトル「マイ・ライフ・イン・ステッチ（縫い目だらけの我が人生）」は、物理的にも感情的にも「縫うことによって修復・回復する」という意味を込めており、心の傷を癒しながらも、元の状態には戻らないという変化の過程を象徴しています。刺繍、レザーアート、布へのペインティング、ビデオアートといった多様なメディアを通じて、回復と成長を描いています。





『リトル・ブラザー』 (2024)

布、アクリル絵具、ベッ
ドカバー

次男のベッドカバーを
使って制作したこの作品
は、長男の困難な状況の
中で、次男が見せた明る
く無邪気な日々を反映し
ています。長男が大きな
困難に直面している間、
次男は一見、影響を受け
ていないように見えまし
たが、実際には静かに耐
えていたのです。この作
品では、深夜3時の静け
さの中で目を覚ます彼を
想像し、私たちには見え
なかった彼の内面の葛藤
と強さを表現しました。



『ファミリーポートレイト』 (2024)

壁用絵具、アクリル絵具、
油性パステル、布

3年半前、私たち家族は非
常に困難な時期を過ごし、
楽しい思い出さえも思い
出せないほどでした。そ
のため、家族の写真をす
べて物置にしまい、飾ら
ないままで過ごしていま
した。しかし、時間が経
つにつれて、家族の肖像
画を作る勇気が湧き、恐
れを乗り越えて、最終的
に全員と一緒に作品を完
成させました。この作品
には、私たちが時間をか
けて癒され、強い絆で結
びついた証が込められて
います。



『13』 (2024)

革染料、油性パステル、マットレスカバー

家族のマットレスカバーを使って、長男が13歳だった頃を描きました。13歳の時、精神的に一番苦しんでいた長男は不登校となり、その後の数年間は彼にとって最も困難な時期となりました。このマットレスカバーには、彼の眠れぬ夜や苦しい日々の記憶が刻まれています。その布を見るたび、当時の辛い記憶がよみがえり、胸が締め付けられる思いがしました。しかし、その上に彼の姿を描くことで、あの時期に一区切りをつけ、感情を解放して空に返すような感覚を得ています。辛い記憶を手放し、明るい未来を見据えることができるようになっていきます。



『断片』 (2024)

壁用絵具、油性パステル、
キャンバス

この作品は、喪失によって現れる新たな強さと弱さを表現しています。私はかつて自分が誰であるかを知っていると思っていたのですが、この3年間の困難を経て、人は常に変化していることを実感しました。人生は、手放し続けることを通じて予期しない形で新しい何かを受け入れる旅だと感じています。



『自画像』 (2024)

アクリル絵具、油性パステル、
金箔、キャンバス

この自画像は、これまでの自分の道のを認め、たくましさ表現するために制作しました。普段、自分を描くことは少ないのですが、この3年間の困難を乗り越えた証として、私の自画像を残したいと思いました。刺繍枠で囲まれた私の肖像画の隣には、**2024年5月に亡くなった愛猫エルサ**が描かれています。エルサは今も私たちを見守り続けているように感じます。この作品は、あらゆる困難を乗り越え今も立ち続ける自分を思い出させてくれます。



『親愛なるエルサへ』（2024）

刺繍糸、布

この刺繍作品は、愛猫エルサを失った後の癒しの過程を反映しています。エルサは私たち家族、特に困難な時期を過ごしていた長男にとって心の支えでした。この刺繍は、エルサへの感謝と祈りを込めたものです。制作していた数週間、私は悲しみを物理的な形に変え、そこに癒しを見出しました。



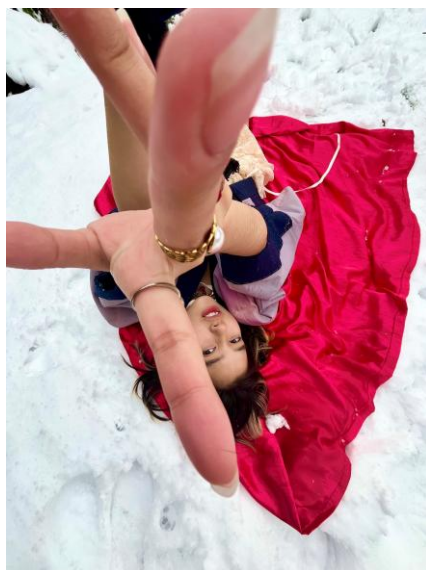
『スキズ』 (2024)

ジェルネイルポリッシュ、牛革
祖母が使っていたレザークラフトセットを使って制作したこのシリーズは、困難を乗り越える力を表現しています。生々しい質感の革は、まるで人間の皮のようで、それをキャンバスにして家族4人の顔を描くことで、苦悩の時期をリアルに映し出しました。死んだ目をした4人の鼻血が示すのは、私たちの心の傷が止めどなく続いていたことです。しかし、この作品を完成させ、家族が「いいね」と言ってくれたとき、私はここまで回復したんだと実感しました。家族としての絆が強くなった今だからこそ、こうして作品を作ることができたのです。この素材は一部の人に不安を感じさせるかもしれませんが、私はこの作品ができたこと、そしてその過程で家族として回復し強くなったことに驚き、深い感謝の気持ちを抱いています。



『風と共に去りぬ』 (2024) 写真

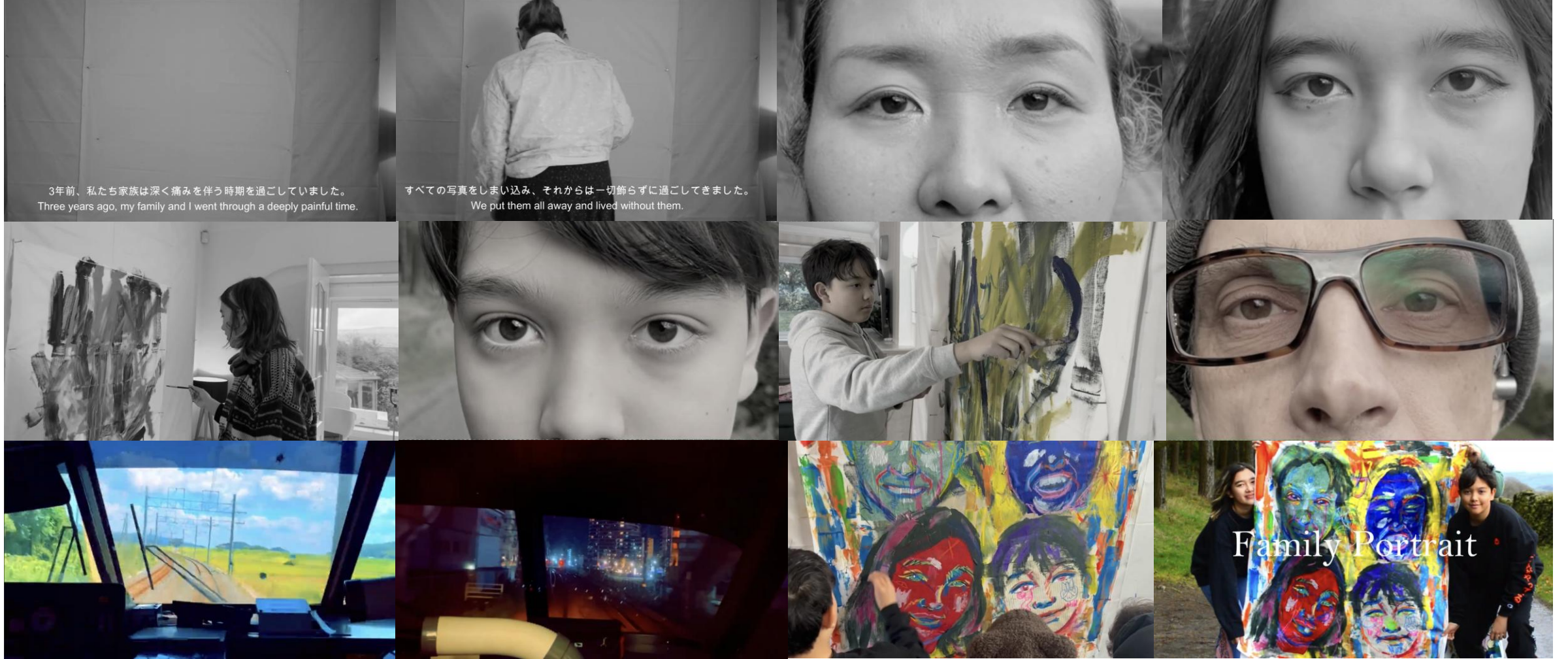
この写真は、過去3年間の困難な時期に「消えてしまいたい」と感じた私自身の思いを映し出しています。『リトル・ブラザー』のベッドカバー作品の一部として、私は人間としての姿を失い、皆から忘れられ、空に溶け込んで消えゆく様子を表現しました。



『11月の彼』 (2024)

写真

この写真作品は、私の長男がトランスジェンダーであることに基づいています。3年前にカミングアウトをして以来、彼は男性的な服装を日々選ぶようになりました。けれども、ある11月の日、彼はアート学校の課題で女性的な格好を選びました。その姿を見たとき、私は久しぶりに彼の中に女性性を感じ、とても驚きました。撮影の手伝いをした際に、私の作品にも彼にモデルをお願いしたところ、快く引き受けてくれました。この瞬間が、彼の女性性を感じる最後の機会になるかもしれないという思いが胸を締めつけます。これから数年内にホルモン注射が始まり、彼の体はますます男性性を強く表すことになるでしょう。この撮影は、母と息子が共に共有した特別な時間として、そして彼の過渡的な状態を記録した貴重な瞬間として、私たちにとって一生の宝物になることでしょう。



3年前、私たち家族は深く痛みを伴う時期を過ごしていました。
Three years ago, my family and I went through a deeply painful time.

すべての写真をしまい込み、それからは一切飾らずに過ごしてきました。
We put them all away and lived without them.

ビデオ作品

『ファミリーポートレート』 (2024)

このビデオ作品『ファミリーポートレート』は、家族全員で描く肖像画を通じて、過去3年の困難を乗り越えた私たちの成長と絆を記録したものです。3年前、辛すぎて家族写真を見られなかった私たちは、新しい家に引っ越してから写真も飾らず過ごしてきましたが、少しずつ心が癒され、家族で肖像画に挑戦する勇気が湧きました。恐れから始まった作業は、最終的に家族の絆を深める作品となり、再生の証となりました。[動画へのリンクはこちらです](#) (音楽にのみ著作権があります。映像は著作権フリーです。)

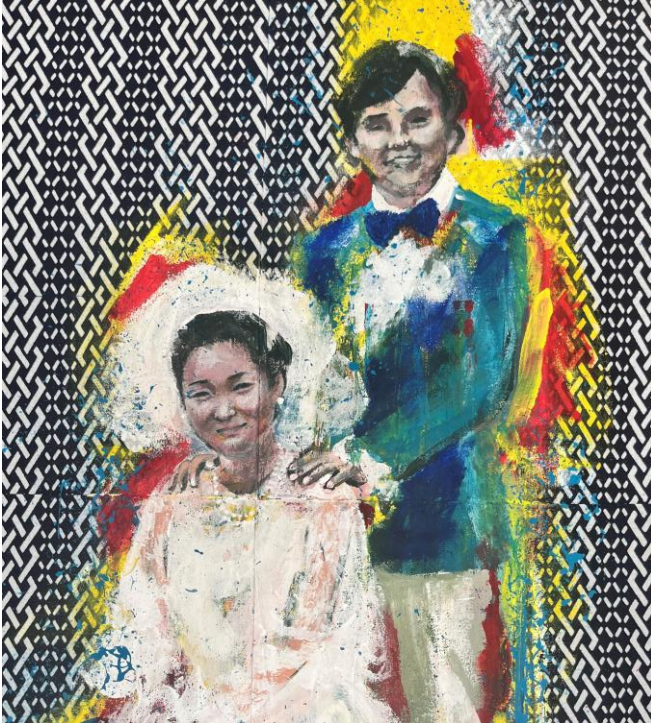


ビデオ作品

『ハッピー・ホワットエバー』 (2024)

数年前、家族が危機的状況にあったとき、私は心を失いそうだと感じていました。その当時、うつ病であることなど考えもしませんでした。社交的で、笑顔を絶やさず、前向きであろうと努めていました。この短編映画『ハッピー・ホワットエバー』は、その時期の自分を映し出すために制作した作品です。

[動画へのリンクはこちらです](#) (著作権フリーです)



『両親の結婚写真1981』（2025）

アクリル、浴衣

この作品は、両親の結婚式の写真を見つけたことから始まりました。私や私の家族が大変な時、誰よりも真っ先にサポートしてくださる福岡の両親。近年、父の健康状態がそこまで良好ではなく、認知症も始まり、二人の生活は少しずつ変わってきています。結婚式の日の思い出だけは鮮明に、そして大切に残したいという娘の思いを込めて、この作品を作りました。父の古い浴衣に描かれたこの作品は、私が最近福岡への里帰りの際にも着たものです。親子3人で撮ったこの写真は、私の一生のお守りとなるでしょう。（長男撮影）

日本とイギリス 3 か所での個展の様子：



大淵園子プロフィール

1982年福岡生まれ、在英25年。マルチメディアアーティストとして、ファインアート、舞台芸術、ビデオ作品を通じて「関係性」や「変容」といったテーマを探求しています。

ロンドン芸術大学で空間デザインの学位を取得後、幅広いクリエイティブ分野で活動してきました。王宮アーティストとしてケンジントン宮殿やロンドン塔でビデオ作品を制作し、これらの作品はお城の永久所蔵品となっています。イギリスでの功績が認められ、天皇皇后両陛下の訪英時には在留邦人として御接見を賜り、皇后陛下とイギリスでの活動や生活についてお話しする機会を得ました。これまで多くの著名アーティストや企業とコラボレーションし、その作品は高く評価されています。



主な受賞歴と評価

- Offies 2024 ノミネート：ビデオデザイン、村上春樹・舞台『スプートニクの恋人』、アーコラ・シアター、ロンドン（2023年）
- アーティスト・イン・レジデンス：ヒストリック・ロイヤル・パレス（ケンジントン宮殿、ロンドン塔）（2006年）作品はお城の永久所蔵品に（2009年）

主な展示歴

- 2025年 - 個展 My Life in Stitches、ジョーダンゲートギャラリー、マンチェスター、イギリス
- 2024年 - 個展 My Life in Stitches、スパツィオギャラリー、福岡、日本
- 2017年 - 個展 POP JAPAN、ダグデールセンター、ロンドン、イギリス

主なプロジェクト

- 音楽ビデオ & アニメーション
 - 2024年 - Kirra-Kirra アニメーション、シンキング・シップ・エンターテインメント、カナダ（アートワーク、コンセプト）
 - 2017年 - Strobelite / Gorillaz ミュージックビデオ（スタイリング）

主なメディア掲載歴

- The Guardian、British Vogue、The Telegraph、British Theatre Guide、1883 Magazine、Wonderland Magazine、装苑、ハイファッション



お問い合わせ

Website <https://www.sonoko.co.uk/>

Email sonoko.obuchi@googlemail.com

Phone (+44) 7815950648